

## 長雨・日照不足に対する農作物技術対策（第2報）

令和2（2020）年7月27日

農政部経営技術課

関東甲信地方週間天気予報によると、向こう一週間は、前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多いでしょう。なお、29日は前線の活動の程度によっては大雨になる恐れがあります。

長雨・日照不足に対する技術対策（第2報）を作成したので、農作物の管理にあたっては、次の技術を徹底するよう指導願います。

なお、農薬を使用する場合には、使用基準を遵守するよう指導願います。

日照時間（6月21日から7月26日まで）（速報値）

観測所	降水量		日照時間		平均気温	
	降水量 (mm)	平年比 (%)	日照時間 (h)	平年比 (%)	平均気温 (℃)	平年差 (℃)
宇都宮	305	120	47.9	41	22.9	-0.3

7月27日5時 栃木県の週間天気予報

日付	27 月	28 火	29 水	30 木	31 金	1 土	2 日	
栃木県 府県天気予報へ	曇のち時々雨	曇時々雨	曇時々雨	曇一時雨	曇一時雨	曇一時雨	曇時々晴	
降水確率(%)	-/30/50/60	50/40/50/40	70	50	50	50	30	
信頼度	/	/	A	C	C	C	C	
宇都宮	最高(℃)	30	27	25 (22~27)	27 (23~30)	29 (25~31)	29 (24~31)	29 (25~31)
	最低(℃)	/	23	21 (19~23)	21 (19~23)	22 (20~23)	22 (19~24)	22 (20~25)
平年値	降水量の合計		最高最低気温					
	宇都宮 平年並 15 - 41mm		最低気温		最高気温			
宇都宮			22.2℃		30.7℃			

### I 普通作物

#### 1 水稲

7月20日調査の水稲生育診断ほ場において、県内14地点中5地点でいもち病の発生が確認されている。

また、栃木県農業環境指導センターのBLASTAMによる葉いもち感染好適条件判定結果では、県内10か所の調査地点で感染好適条件日が増えている。

(URL : <http://www.jppn.ne.jp/tochigi/file/data/Blastam/2020.htm>)

今後の気象予報からも、葉いもちが発生しやすい条件の日が続く見込みなので、ほ場をよく観察し発生が認められた場合は、治療と予防効果のある殺菌剤を散布する。現在5月上旬移植のコシヒカリは出穂始めの時期であり、上位葉に葉いもちが発生している場合は、穂いもちに移行するため適用のある水和剤等で直ちに防除を徹底する。



## 2 大豆

- (1) 排水溝を整備する等、排水対策を徹底して、立枯性病害の発生を予防する。
- (2) 断続的な降雨により播種作業が遅れているほ場については、土壌が乾くのを待って播種作業を進める。なお、播種直後に強雨が想定される場合は播種を見送る。また、畦立て播種を行い、出芽率の向上に努める。
- (3) ベと病が発生しやすいため殺菌剤の予防散布を行う。

## 3 こんにゃく

- (1) 排水溝を整備する等、排水対策を徹底する。
- (2) 腐敗病や根腐病が発生しやすいため殺菌剤の予防散布を徹底する。

## 4 ゆうがお

- (1) 排水溝を整備する等、排水対策を徹底する。
- (2) 炭疽病、褐斑細菌病が発生しやすいため殺菌剤の予防散布を徹底する。

# II 野菜

## 1 野菜全般

- (1) 湿害をさけるため、ほ場周辺に排水溝や明渠を掘って、ほ場内が滞水しないようにする。
- (2) 曇雨天時の葉かきや芽かき等は極力控え、これらの管理は晴天時の午前中に行い、夕方には傷口が乾くようにする。
- (3) 曇雨天日が長く続くと茎葉が徒長気味となり、生理的落果や病害多発の原因となりやすいため、古葉は早めに取り、風通しと日当たりを良くする。
- (4) 殺菌剤の予防散布を徹底するとともに、かん水や追肥は多量に行わず、1回当たりの量を少なくして回数を多くする。
- (5) きゅうり・なす・トマト等は小果（S～Mクラス）で収穫し、株の着果負担を軽くする。

## 2 施設野菜全般

- (1) 軟弱徒長気味の生育となるため、ハウス屋根被覆の汚れを落とすなどして、採光を高める。また、曇天時は遮光資材を解放して、できる限り光線を当てるようにする。ただし、曇雨天後の強日射は軟弱に生長した植物体に高温障害、蒸散過多による萎れ等を引き起こすことがあるので、寒冷紗による遮光等、強日射・高温への対策を併せて準備しておく。
- (2) 灰色かび病等の病害が発生しやすい条件となるため、殺菌剤の予防散布を徹底するとともに、十分な換気を行い施設内の通風を図る。また、循環扇の活用により湿度低下に努める。

## 3 いちご

- (1) 苗の活着後は、遮光資材を解放するとともに、定期的な葉かきやポット等の間隔を広げる等の管理により、積極的に日光に当て株の充実を図る。ただし、曇雨天後の強日射は高温障害、蒸散過多による萎れ等を引き起こすことがあるので、遮光資材の活用等、強日射・高温への対策を併せて準備しておく。

- (2) 追肥は多肥とならないよう生育に応じて行う。
- (3) 炭疽病、うどんこ病の発生を未然に防止するため、殺菌剤の予防散布を徹底する。

#### 4 夏秋なす

- (1) 全面マルチ栽培では、マルチ上への滞水を防止する。
- (2) 花や果実に光が当たるように整枝や葉かきを行う。
- (3) 菌核病、灰色かび病の発生を未然に防止するため、殺菌剤の予防散布を徹底する。

#### 5 にら

- (1) さび病、白斑葉枯病の発生を未然に防止するため、殺菌剤の予防散布を徹底する。

#### 6 雨よけトマト

- (1) 草勢維持のため、不良果の摘果を行い株の着果負担を軽くする。
- (2) かん水は1回当たり多量に行わず、天候をみながら回数を多くする。
- (3) 灰色かび病、疫病等の発生を未然に防止するため、殺菌剤の予防散布を徹底する。

#### 7 夏秋きゅうり

- (1) きゅうりは浅根性で、滞水すると根が酸素不足になり生育が抑制されるので、特に排水対策を徹底する。
- (2) 花への採光性を良くし風通りを良くするため、側枝かきや葉かきは早めに実施する。
- (3) うどんこ病、べと病、灰色かび病等の発生を未然に防止するため、殺菌剤の予防散布を徹底する。

#### 8 ねぎ

- (1) 植付け溝への滞水を防止するため、排水溝を整備する等、排水対策を徹底する。
- (2) 土入れ・土寄せは、土が降雨後の加湿状態で行わない。
- (3) べと病、黒斑病、さび病等の発生を未然に防止するため、殺菌剤の予防散布を徹底する。

#### 9 かぼちゃ

- (1) 排水溝を整備する等、排水対策を徹底する。
- (2) べと病の発生を未然に防止するため、殺菌剤の予防散布を徹底する。

### III 果樹

#### 1 果樹全般

- (1) 湿害をさけるために果樹園に排水溝や明渠を掘って、園内が滞水しないようにする。
- (2) 傾斜地では、土壌の流亡を避けるために、草生栽培とし、当面耕運はしない。
- (3) 病害防除のため薬剤散布を行う際は、防除基準の遵守やドリフト低減に努める。

#### 2 なし

- (1) 4月の低温による着果不足や果実肥大状況等をよく確認し、極端な小玉果、変形果および障害果等を中心に摘果する。
- (2) 予備枝から発生した新梢を1～2本に整理する。また、混み合っている部分の新梢は数本取り除く。

- (3) 黒星病の芽基部病斑、罹病葉及び果実は見つけ次第摘み取り、ほ場外に持ち出し処分する。薬剤による防除は雨前防除を基本とする。

### 3 ぶどう

- (1) 露地栽培では、摘粒終了後速やかに袋かけを行う。
- (2) 灰色かび病、べと病、晩腐病の発生が懸念されるので、発生状況に応じた薬剤防除を行う。

### 4 りんご

- (1) 果実肥大状況等をよく観察しながら着果管理を行う。
- (2) 斑点落葉病、褐斑病等の発生が懸念されるので、予防防除を基本とし、発生状況に応じた薬剤防除を行う。

## IV 花 き

### 1 花き全般

日照不足により、軟弱徒長になり品質の低下と灰色かび病等の発生を助長するので、晴天時以外の遮光等は取り除いてできる限り日照を確保するとともに施設内の通気等を図り湿度を下げるように努める。

### 2 き く

- (1) 露地ぎくは、ほ場周囲に排水溝を整備し、排水に努める。
- (2) 露地ぎくは黒斑病、褐斑病等が発生しやすいため、殺菌剤の予防散布を徹底する。
- (3) 施設ぎくは、白さび病が発生しやすいため、殺菌剤の予防散布に努めるとともに、病葉の摘除を行う等発生しにくい環境にする。

### 3 ば ら

- (1) べと病が発生しやすいため、湿度を下げるなど環境を整える。また、殺菌剤の予防散布を徹底する。
- (2) うどんこ病が発生しやすいため、窒素肥料の多用を避ける。枯れ葉を整理し、通風を良くするとともに、殺菌剤の予防散布を徹底する。

### 4 りんどう

- (1) ほ場周辺に排水溝を整備し、排水に努める。
- (2) 定植1年目の苗は葉枯病が発生しやすいため、降雨後に殺菌剤を散布する。
- (3) 花および茎に菌核病が発生しやすいため、殺菌剤の予防散布を徹底する。

### 5 シクラメン

- (1) この時期に窒素過多となると葉腐細菌病等が発生しやすくなるので、肥培管理を適正にし、病害の発生しにくい栽培管理に努める。

## V 飼料作物

### 1 飼料用とうもろこし、牧草

- (1) 湿害が心配されるほ場では、排水溝を整備する等排水対策を徹底する。
- (2) 日照不足により生育が遅れる場合が多いことから、子実の熟期をよく確認し、適期に収穫作業を開始する。
- (3) 生育不良による品質低下が懸念される場合は、糖分や乳酸菌等のサイレージ添加剤の利用、ビートパルプ、フスマ等による水分調製を行う。